

小説『二時間の傾聴― 石破と小泉の夜』

第一章 秋の気配

九月に入っても、東京の残暑は衰えを見せなかった。だが、夜風の端々にはかすかな秋の気配が忍び寄っていた。永田町の街路樹がほんの少し色を変え、官邸の窓から洩れる光が、どこか冷ややかに見える季節だった。

衆議院選挙、都議会選挙、そして参議院選挙――。いずれの戦いでも自民党は劣勢を強いられた。テレビの速報テロップが「与党苦戦」「自民、議席を減らす」と報じるたび、党内の空気は重苦しさを増していった。選挙特番で映し出される候補者の表情、その背後に並ぶ支持者たちの疲れ切った姿は、政権の屋台骨が揺らいでいることを突き付けていた。

夜の官邸は、昼間の喧騒が嘘のように静まり返っていた。廊下を行き交う職員たちの足音は抑えられ、電話のベルすら遠慮がちに響く。秘書官たちの声は低く、紙をめくる音がやけに耳につくほどだった。選挙敗北の責任をめぐる囁きが、あちこちで交わされていた。

「総理は、どうされるおつもりなのか」――。

そんな問いが、党内外で繰り返し囁かれていた。石破茂総理に直接そう問いたです者はいなかったが、皆が同じ疑問を胸に抱えていた。

記者会見での総理の表情は毅然としていた。けれども、選挙のたびに深まる皺、演説の合間に見せるわずかな疲労の色は、誰の目にも明らかだった。かつて「地方創生」を旗印に掲げ、誠実な語り口で支持を集めたその姿は、依然として人々の記憶に鮮やかだったが、現実の政治の重圧は、静かに石破を追い詰めていた。

「辞めるべきか、続けるべきか」――。

答えはまだ出ていなかった。だが、秋の夜気の冷たさが、その決断の刻限が近いことを告げていた。

第二章 去来する影

石破茂の胸には、いくつもの記憶が去来していた。

国政選挙での敗北が重なった今、党内外から責任を問う声が日に日に強まっている。表向きは「辞める必要はない」との世論も存在した。しかしその裏には、「党の顔として戦えないのではないか」という疑念が絶えずつきまとっていた。

石破はこれまで、党総裁選に四度挑み、そのすべてに敗れてきた。二〇〇八年、二〇一二年、二〇一八年、二〇二〇年——。いずれも「地方に強い石破」「黨員支持率では優位」と評されながら、国会議員票で跳ね返されるという現実を味わった。地方の声を背に立ちながら、永田町の論理の壁に阻まれ続けた。その痛みは、彼の政治人生に深い陰を落としていた。

「なぜ自分は、議員仲間から信頼を得られないのか」

自問を繰り返す日々。選挙結果を受けた辞任論が高まる今も、その問いはなお彼の胸を刺し続けていた。

さらに、総裁選の前倒しを求める声が党内に渦巻いていた。もしも九月八日の記名投票で前倒しが決まれば、支持・不支持は白日の下に晒される。同志の名が一票一票に刻まれ、賛否の色分けは修復不能な亀裂を残すだろう——その危機感は、石破自身も痛いほど理解していた。

「辞任すべきだ」という声と、「ここで退けば無責任だ」という声。その双方が石破を挟み込み、夜ごと眠りを奪った。国民の負託に応えたいという思いと、党を割ってはならないという責任感。その二つの重荷が交錯し、彼の心を暗い影で覆っていた。

秋の気配を帯びた官邸の執務室で、石破は机に広げられた資料を前に、しばし言葉を失った。選挙戦で敗北した地図上の赤い印は、ただの数字ではなかった。そこには支持者の嘆きや、無数の声なき不満が刻まれていた。

窓の外では、夜風に揺れる街路樹の葉がかすかに擦れ合っていた。その音は、これまでの政治人生の軋みを思わせ、石破の心を一層重苦しいものにしていった。

第三章 菅の影、小泉の声

六日の夜、官邸の一室に重苦しい空気が漂っていた。

扉を開けて入ってきたのは、副総裁の菅義偉と、若き小泉進次郎であった。二人は、党内に広がる疑心暗鬼を背に、石破総理のもとを訪れたのである。

前日から「解散論」が流布し、党内の不安と不信は膨れあがっていた。もし八日の午前十時に予定される記名投票で、総裁選の前倒しが決まれば、誰が賛成し、誰が反対したのかが明らかになる。色分けが鮮明になれば、党の分裂は避けられない――。その危機感を、小泉は菅に訴え続けていた。

「石破総理に直接、伝えていただけませんか」

小泉は、何度も電話を重ねて懇願した。自らが説得する立場ではないと理解しているからこそ、石破の胸に届く言葉を持つのは、菅しかいないと考えたのだ。

菅はその思いを受けとめ、やがて一言だけ告げた。

「分かった。小泉さんも一緒に行こう」

予想外の言葉に、小泉は息をのんだ。自分は同席する資格があるのだろうか。だが、党の存亡がかかった局面で、躊躇している余裕はなかった。

会談が始まると、菅はまず口を開いた。

「このままでは、党は分裂しかねません」

静かで低い声だったが、その言葉には重みがあった。長年政権の中枢を支えてきた政治家だからこそ知る、組織の危うさ。その声が部屋に落ちるたびに、石破は小さく頷きながら耳を傾けた。

約三十分が過ぎたところで、菅は席を立った。

「後は、若い人とも話してみてください」

そう告げて退室しようとしたとき、石破は思わず声をかけた。

「小泉さんも帰るのか」

その一言に、小泉の胸は高鳴った。

「残ってもよろしいのですか」

「いいよ。予定は大丈夫か」

「はい」

こうして、二人だけの時間が始まった。

それからの二時間、小泉はほとんど言葉を挟まず、石破の語りをひたすら受けとめた。過去の総裁選での苦い記憶、国政選挙での敗北の責任、そして米国との関税交渉に一区切りがついた安堵と無念。語りながら、石破自身の中で思いが次第に整理

されていくのがわかった。

「私が、ここで責任を取らなければならないのかもしれない」
その呟きに、小泉はただ深く頷いた。説得ではない。相槌でもなく、問いかけでもない。ただ「そこにいる」こと自体が、石破の心を支えていた。

夜の静けさに包まれた官邸で、時折、時計の針の音が響いた。二時間という長い時間が、二人の間に沈黙と対話の両方を刻んでいった。

第四章 二時間の傾聴

官邸の一室に残されたのは、石破と小泉、二人だけだった。
静寂が訪れると、石破は深く息を吐き、言葉を探すように口を開いた。

「……私は、何を間違えてきたのだろうか」

その問いは、誰に向けられたものでもなかった。だが小泉は、それを遮らず、ただ受け止める。

石破の語りは途切れることなく続いた。総裁選に四度挑んで敗れ続けたこと。永田町の論理と地方の声との断絶。党員の支持を背にしながら、議員仲間からは遠ざけられる孤独感。

そして、国政選挙での敗北。自らが「党の顔」として戦ったはずなのに、結果は重い責任となって肩にのしかかっていた。世論は「辞めなくてもいい」と囁くが、その言葉がかえって胸を締めつけた。党を割るような決定的な分断を避けたい気持ちと、ここで退けば無責任だとする声との間で、彼の思考は揺れ動いていた。

「八日の記名投票が迫っている。あれが行われれば、誰が賛成で、誰が反対か、すべてが白日の下にさらされる。党が割れてしまうかもしれん」

石破は自分の言葉に頷くように、拳を握った。
「それだけは避けたい。だが……それならば、私が退くしかないのか」

小泉は相槌を打たない。ただ、深く目を見てうなずいた。その眼差しには否定も肯定もなく、「聞いている」という確かな意思だけがあつた。

二時間——。

時計の針は確実に進み、外の闇はさらに濃さを増していった。石破は過去の選挙戦での無念を吐露し、米国との通商交渉に一区切りがついた安堵を語り、そして「然るべきタイミング」が今であると自らの口で言葉にしはじめた。

「私は、地位に恋々とするものではない。やるべきことを果たした今、決断のときが来たのだろう」

その声には、疲れと同時にどこか晴れやかな響きが混じっていた。

小泉は一言も「辞めるべきだ」とは言わなかった。ただその場において、石破が自ら答えに辿り着く過程を見届けていた。

説得ではなく、傾聴。

沈黙の中で、総理の心は整理され、決断へと導かれていった。

第五章 夜明け前の決断

会談の終わりが近づいたころ、石破の表情は初めとは違っていった。

重苦しい影を背負ったままではあったが、その眼差しには、どこか覚悟の光が宿り始めていた。

「米国との交渉は、先週、ようやく一区切りがついた」

石破はゆっくりと語った。

「これ以上、この問題を後継に持ち越すことはできない。交渉をまとめたのは私だが、引き継ぐのは新しい総裁であっていい。むしろ、その方が党も国も前へ進める」

小泉は黙って耳を傾けていた。言葉を差し挟まなくても、石破の声が自ら深まりを増していくのが分かった。

「選挙結果に対する責任は、総裁たる私にある。……かねてから、然るべき時に身を引くと申し上げてきた。その時が今なのだろう」

石破は机の上に置かれたペンを手にとった。握った手はわずかに震えていた。総裁としての一年間、地方創生、経済安全保障、災害対応——成し遂げたい事業はまだ道半ばであった。しかし党を分断させるわけにはいかない。党内の記名投票が迫る

中、自らの決断が唯一の道だと理解していた。

「私は……明日、辞任を表明する」

その声は驚くほど静かで、しかし揺るぎなかった。

小泉は深く頭を下げた。

「ありがとうございました」

その一言に、石破は小さな笑みを浮かべた。感謝というより、安堵の色に近かった。彼の胸に去来していた葛藤は、決して完全に消え去ったわけではない。だが、決断を口にしたことで、自らの中に新たな静けさが広がったのだった。

外の窓はまだ闇に包まれていた。時計の針は深夜を指し、遠くで新聞配達のパイクの音がかすかに響いていた。

その音を聞きながら、石破は一つの時代が終わり、次の幕が開くことを直感していた。

第六章 翌日の表明

九月七日、日曜日の夕刻。官邸の会見室には、緊張の空気が張りつめていた。

壇上に姿を現した石破茂の顔は、前夜とはまた違う色を帯びていた。疲労と無念を隠さぬままに、それでも前へ進もうとする覚悟をたたえていた。

「この度、私は自由民主党総裁の職を辞することといたしました」

開口一番の言葉に、会場が静まり返る。フラッシュの光が絶え間なく瞬き、記者たちの手元ではペンが一斉に走った。

石破は一つひとつの言葉を、噛みしめるように続けた。

米国との通商交渉に一区切りがついたこと。総裁として、選挙の結果に対して責任を負わねばならないこと。

「私は、地位に恋々とするものではない」と前々から語ってきたとおり、やるべきことを成し遂げた今こそが「然るべきタイミング」であると考えたこと――。

言葉を紡ぎながら、石破の瞳にはわずかに光るものが宿っていた。それは涙ではなかった。だが、政治家としての誇りと悔恨が交錯する、確かな輝きであった。

会見場の空気は重く、しかし厳粛だった。

記者の中には「まだやるべきことがあるのでは」と問う者もいた。石破はその声を否定も肯定もせず、ただ「党を割ってはならない」という思いを胸に沈めた。口に出せば言い訳になると知っていたからだ。

演説の終盤、石破は国民への謝意を深く述べた。

「国民の皆様のお支えがあって、ここまで務めることができました。本当にありがとうございました」

その瞬間、場にいた誰もが、彼の背負ってきた重みを思わずにいらなかった。

会見を終えて退場する石破の背は、これまでよりも小さく見えた。しかし同時に、その歩みは決して後ろ向きではなく、静かに次代へと道を譲る者の足取りであった。

エピローグ 静かな余韻

会見を終えた夜、官邸の灯は静かに落ちていった。

昼間の喧騒とフラッシュの嵐が嘘のように、外の空には初秋の月が浮かんでいた。

小泉進次郎は、すでにその場にはいなかった。彼が耳を傾けた二時間は、石破にとって決断の道を歩み始めるための静かな助走であった。説得ではなく傾聴。ただ「そこにいた」ことで生まれた時間が、最終的な言葉を石破自身の口から引き出したのだった。

石破の胸には、まだ多くの無念が残っていた。地方創生は道半ばであり、経済再建も、社会保障改革も、まだ果たせぬ課題は山積している。だが、党を割るわけにはいかない——その一点だけは揺るぎなかった。

「然るべきタイミング」という言葉を口にした彼の心中には、達成感と同じくらい、悔恨が濃く沈んでいた。

それでもなお、その決断は彼自身のものであった。

静まり返った官邸の廊下を歩きながら、石破はふと立ち止まった。

遠くで時計の針が刻む音がする。あの二時間もまた、確かに時を刻んでいた——彼の政治人生の、決して忘れ得ぬ一章として。

扉を閉じると、夜の闇は静かに彼を包み込んだ。
そこには喪失感と同時に、不思議な清澄さがあった。

——歴史は、この夜をどう記すのだろうか。

答えはまだ誰にも分からない。ただ一つ確かなのは、二時間の傾聴が、一人の総理を大きな決断へと導いたという事実である。

—終わり—

Stories on the way.

あとがき

本作で描いた「二時間の傾聴」は、政治の世界に限らず、キャリア相談の現場にも通じるものである。

相談者は往々にして、明確な答えを求めて面談に訪れる。しかし本当に必要なのは、誰かに説得されることなく、自分自身の言葉を語りながら整理し、納得できる結論に至る過程である。

キャリアコンサルタントに求められるのは、巧みな助言よりも、相手が安心して語れる場をつくり、問いと沈黙を通じて内省を促すことだ。まさに「説得しない説得」であり、主体性を尊重した支援である。

石破総理が二時間の語りの中で自ら結論に至ったように、相談者もまた、自らの意思で歩み出すことで、次のステージへ進んでいく。その瞬間を支えるのが、私たちが学ぶべき「傾聴」の力なのだ。

2025年9月 著者

小説『二時間の傾聴 ― 石破と小泉の夜』は、報道された事実を背景に、著者の想像力を交えて再構成した創作作品です。

作中の会話・心理描写はフィクションであり、実際の人物の言動を正確に再現したものではありません。本文の著作権は著者に帰属します。引用・転載は著作権法の範囲内を除き、事前の許可なく行うことを禁じます。